

2026年度 神戸市外国語大学 学校推薦型選抜・社会人特別選抜 入学試験問題【小論文】

次の文章を読んで、下の設問に答えなさい。

社会がパニックに陥ると、メディアをにぎわす言葉がある。それが「正しさ」だ。これはたいてい次のような活用とともに使われる。

「正しい知識」

「正しい理解」「正しく理解」

「正しく恐れる」「正しく怖がる」

コロナ禍中の朝日新聞も例に違^{たが}わない。データベースを遡ると上記5フレーズが使われたコロナ関連の記事は約140本あり、それら記事の8割強が2020年に集中する。

これらの記事が「正しさ」を掲げる時、その「正しさ」は科学的なコロナ理解のことを指す。従って「新型コロナを“正しく”怖がっている人」というのは、コロナを科学的に正しく理解した上で怖がっている人のことだ。「科学的に」の部分「エビデンスに基づいて」あるいは「科学的事実に基づいて」と置き換えてもいいだろう。

また記事に目を通すと、共有される前提も見えてくる。

コロナをめぐる差別や偏見、過剰な対応は、人々がコロナを正しく理解していないから起こる。皆が正しい知識を身につけ、コロナを正しく恐れられるようになれば、そのような悲劇はなくなるはずだ。

これは、コロナに限らずありとあらゆる問題で広く共有される思考といってよい。(中略)

とはいえ、何かについての「正しい理解」を持つ人は、それを「正しく恐れる」ことができる。ひいては適切な感染対策ができて、偏見も持たないという前提は少々雑ではなかろうか。

(中略)

コロナ禍では、混乱した状況に道筋をつけるため、人々は正しさを求め、それに呼応するかのよう^にに医師などの専門家が積極的な発言を行った。正しさを求める人と、正しさを発信したい人が大きなうねりを作り、夥^{おびただ}しい量の情報が拡散された結果、「反マスク」「コロナ脳」といった極端なラベリングを用いた中傷も起こった。

この過去を踏まえた上で、素朴な問いを投げてみたい。コロナについて医学的な発信を積極的に行っていた人々がいる現場では、正しい知識に基づいた、丁度いい感染対策が行われていたのだろうか？

(中略)

新型コロナが5類になる直前の2023年4月、とある医学会に参加した。私が登壇したのはコロナと情報発信に関するシンポジウムだ。

そこで私は目にした光景に驚くこととなる。なぜなら、それぞれの発表が終わり、発表者全員が全体討論のためにステージに上がった際、係員がアクリル板を登壇者同士の間^ににセットし始めたからだ。

シンポジウム会場は、千人以上が収容でき、ステージの奥行きだけでも10メートル以上あるような場所である。オンライン配信もあったため会場は空席の方が多く、登壇者は横並び、大声を出す訳でもな

2026年度 神戸市外国語大学 学校推薦型選抜・社会人特別選抜 入学試験問題【小論文】

い。どう考えてもアクリル板は不要だろう。しかもこのシンポジウムでは、正しい知識に基づいて感染対策をすることの重要性、誤った情報の拡散により社会の分断がもたらされること、正しい知識を市民に伝えることの難しさなどが述べられていたのである。

アクリル板は、違和感を唱えた私の発言と、それに同調したもう一人の発言を契機にその場で取り去られた。しかし、このような「感染対策」が、医学会でなされることが既定路線であった現実をどのように捉えたらよいのだろう。

シンポジウム後私は、医師などの学会関係者から次のような言葉をかけられた。

「これは学会ではなく会場側の運用だから私たちは口を出せない」

「立場上言えない」

「磯野さんが言ってくれてよかった。私たちは言えない」

ちなみにこの学会から1週間ほど後に開かれたもう一つの医学会では、参加した医師たちがミュージシャンの演奏を楽しんだ後、ノーマスクで会食し、胴上げをしてはしゃいでいる様子がSNSで拡散されていた。

私はこのエピソードを通じ、専門家を告発したいわけではない。行きたいのは、科学的事実なるものを、演劇の舞台の上に置かれた小道具のように考えてみようという提言だ。

例えば先の医学会で現れたアクリル板について、感染症に詳しい専門家にアンケートをとったとしよう。これについて「エビデンスに照らして必須であり、撤去はあり得ない」と答える専門家はほとんどいないのではないか。

ところが自分が当事者、つまり舞台上の演者になると、途端にそうは言えなくなる。その場の人間関係や、他者の視線といった複数の要素が、言動の決定プロセスに多分に入り込んでくるからだ。つまり、「正しい知識」なるものを持っていたとしても、今ここの言動にそれらが影響を及ぼす割合はぐっと少なくなってしまう。

その結果、素人でも首をかしげるような対策に対し、「立場上言えない」といった弁解が発生する。立場を使って一番発言ができそうな医師ですらこうになってしまうのだから、非専門家は言わずもがなだ。

たとえば、緻密に検証された科学的事実は学術誌などの言論空間において、王冠のような権威を持つ。それが登場したら、平伏す^{ひれふ}とまではいかなくとも敬意を払わなくてはならない。しかしその王冠も、舞台と脚本が変われば、部屋の中の取るに足らない一つのオブジェになったり、権威に従わないことを示す決意の証しとして、蹴飛ばされ、踏みつけられたりする存在になったりする。

科学的事実なるものがどこでどのように登場するかで、その役割も重みづけも変化するのに、混乱時はそのことが忘れられ「それは間違っている」「科学的リテラシーがない」といった、文脈を無視した一面的な批判が跋扈^{はつこ}する。

医学や疫学の視点に基づく知識は間違いなく有用である。しかしそれは、マニュアルが示す「ハサミの正しい使い方」のようなものであり、混乱状態にある社会現象を理解したり、整理したりする知識としては不十分なのだ。私たちはハサミの正しい使い方を知りながら、あえて違う使い方をすることがあり、その理由がマニュアルの勉強不足にあるとは限らない。

これを踏まえるともう一つ必要なのは、ハサミが金槌^{かなづち}のように使われたり、王冠がバケツの代わりに使われたりするような状況が発生した際、そうなった理由を舞台環境と脚本を踏まえて分析する視座で

2026年度 神戸市外国語大学
学校推薦型選抜・社会人特別選抜 入学試験問題【小論文】

ある。しかし「正しければうまくいく」という発想に囚われていると、こちらがおろそかになってしまうのだ。

磯野真穂（2024）『コロナ禍と出会い直す—不要不急の人類学ノート』柏書房、16–26 頁より抜粋。出題に際して一部表記を変更した箇所がある。

設問 本文中では、なぜアクリル板が設置されようとしたかについては具体的に述べられていない。設置の理由を考察するとともに、当時のコロナ禍で生じた様々な混乱において、「科学的事実」と「正しさ」がどのような関係にあったかを、600～800字で論じなさい。（100点）